

学生への教育については、大学等教育機関によるものがあるが、専門分野の学協会もその任を担うことで最近度良くしている。ここでは建築分野において、建築学会の北陸支部が学生に対し、意欲的な取り組みをしているので、ここに消化する。これはいわば学生への志教育と呼んでも差し支えない特徴的な教育ともいえる。紹介する。

0. はじめに

建築学会北陸支部では学生のための知的交流を目的として「学生のための語り合いのシンポジオン」なる企画が支部大会会期中に運営されている。これは、支部が提供する、学生の皆さんに知的交流のチャンスと場のことであり、学生からの話題の持ち寄りの語り合いにより、学生同士はもちろんのこと職業人や市民をも交えての交流が図られ、これまでに多くの方々の支持を得て、回を重ねるごとに盛り上がり、今日に至っている。

しかしながら、シンポジオンの盛り上げパワーがやや減少したためか、運営に際して当時の盛り上がりがかげり始めている。とはいえ、学生を主体としたフランクな知的交流場の価値は少しも揺るぐことはなく、今後に向けての潜在的な期待は却って高まっているとみている。

かかる状況を踏まえて、今後もシンポジオンを続けていくために、2003年から20年弱のこの時期をひとつの節目としてこれまでのシンポジオンの活動を振り返り、また次に向けての仕切り直すことにした。すなわち、シンポジオンの目指すところの周知徹底により、若い世代の結集と大人衆のエネルギーパワーアップを兼ねたいと考える。

具体的には、シンポジオンを十分周知することを目的に、シンポジオンがなぜ必要か、発足経緯を含め、これまでの活動を紹介し、あわせて参加の方々の思いをも記すことにして、皆様方の参加を切にお願いする次第である。

なお、執筆については、本来はこれまで支えてこられた多くの方々全員の共同執筆とすべきところであるが、ここでは発起人と(現)世話人代表の2名とさせていただいた。冒頭、皆様方に記して謝意を表します。

2. 学生向け企画の議論背景 多少後付けで

2.1 全員者全員の満足につながる交流

多数(全員)参加の多数満足の交流について背景を二点のべる。

・一般に、発表する機会は数多くあっても、フランクな交流の機会は割合少ない。理由は、ある程度の素養がないと参加できないのではといった遠慮が先行しているからと考える。特に交流では、構えてする交流もいいが、自然体の交流が多数参加の多数向上として必要としたい。のちに述べるシンポジオンはそんな背景をもとにしている。

・今一つ述べたいことは、世の中の専門分化分業時代における交流への姿勢である。分化された各々の領域について、総合化というよりも連携化していくかが問われていることはいうまでもない。ならば、余計にフランクな交流が下地になっていくのではなからうか。

・では、フランクな交流の主体は誰なのか。そうした交流を一番望んでいるのは次代を担う若者と(市民のとの最前線に立つ)実務者ではなからうか。彼らが(能力・素養の)自分磨きと相互尊重を徹して、社会の多様性のもとで細分化系を枠外思考できるよう、種々方々との知的交流が不可欠と考える。

2.2 学会活動にて 草の根志向で

教育については、各大学において、教室だけでの教育のみならず地域に打って出る実践も実を結び、大学間の交流も盛んになっている。

一方の学会では、特に若者の育成や市民啓発活動等として、全国卒業設計展を始め各種の学生向け取り組みをしている。

しかしながら、そこまでやっているなら今少し交流の観点があってもいいのではと思う。こうした思いから考え出されたのがシンポジオンである。学生の中に社会の多様性や相互尊重などの人間的素養の磨きが専門教育とリンクさせるのは学会において他になしと考える。

3. 経緯 (シンポジオン発足から今日まで)

2001年から支部活動活性化の議論が始まり、その後、シンポジオンが発足。発足から今日までを経緯として記す。

・2001年 事業委委員会にてまずは学生と実務者にもっと学会が取り組むべしとして企画の検討。その後、研究委員会の協力のもと、以下の二点を検討。

学生への支援、実務者への支援(技術報告に道を開く)

・2002年 支部大会長野にて、長野支所の協力を得て実務者企画「実務者討議の集い」を実施。実務者を取り巻く問題を検討。若手への対応についても検討要となる。

・2003年 北陸支部大会金沢にて若手の問題を扱うこととして、石川支所の全面協力を得てシンポジオン実施。(特に当時石川支所長久保猛先生と現支部長永野紳一郎先生のご尽力で)。これが学生シンポジオンの原型となった。これ以降、支所持ち回りで支部行事として毎年恒例開催。

・2016年 世話人(会)が発足し、大会開催支所のアシストとして運営に参加。運営に工夫(支部の各種参画とのバランスを考えて)

・2020年 支所におけるシボジワに係る方々の世代交代に向けて検討、支部大会全体の各企画のバランス検討。

・現在に至る

4. シンポジオンの特徴の設定

4.1 特徴の概要

場においては、自由かつ平等で相互尊重が漂うものとする。これを実現するために、いくつかの方法を導入とした。

- ・学生が話題を持ち寄る。オリジナリティやレベルを不問として種々の観点でのぞむ。
- ・参加者との語り合い。これを楽しむようにする。
- ・参加者全員が語り合いに参加。
- ・参加者を建築中心であるが他分野にも声がけ。
- ・職業時と市民も参加で多様な場。

4.2 特徴の設定

上節と多少重複するが、待ち望まれる形態の場について、他の種の場との比較により、特徴を浮き彫りにしたい。

・対等で自由な場のもとでの交流にあり、これは研究発表・デザイン発表、学内の発表会・講評会との決定的な違いである。

・討論ではなく語り合いにより、開かれた知的交流を実現。しかも、交流には、学会の場にて学生・職業人・市民の結集による多様性で磨きがかかっている。

4.3 語り合いの必要性

語り合い形式を考えたのは、通常のシンポジウムには不満があるからである。すなわち、複数パネラーの個々発表とパネラー同士での討議(時々フロアも参加)では、フロアはパネラーの考えを聞くだけにすぎず、双方向の討議ができない。そこで改善の基本として、全員がパネラーであり主体者として位置づけられれば、垣根を超えた双方向の論議が可能となり、しかも論議ではなく語り合いであれば、誰でもが自分の考えを基調にすることができると考えた。こうすることで、より相互に交流できることになる。

5. シンポジオンの概要

5.1 運営

支部として学生の知的交流を支援するためのしくみが以下になっている。

- ・支部を挙げての行事、大会開催支所が企画運営。
- ・学生が時には主体的運営(学生が世話人として参入)
- ・学生は主体者として知的交流。
- ・交流においては、参加者同士が対等・平等で自由闊達に語り合い。

5.2 目的

目的は、学生各自の主体的実践活動を話題にして、学生主体で学生同士、職業人、市民との知的交流を楽しむことである。

具体的には、学生は話題提供と語り合いを本文として場に参加し、そこにおいて参加者全員で交流をする。学会支部は学生に交流のチャンスと場の提供を使命としている。

5.3 参加者

これまで16年間、支所の持ち回りで支部企画「シンポジオン」が実施された。以下に参加者の属性等を記す。

- ・参加者総数は700人程、各回では25~90人、平均44人
- ・学生；開催大学学生の参加が多いが、北陸管内の地域からまんべんなく参加。学部2年~大学院生。分野では計画系が多い。この他構造系はもちろんのこと土木・交通・文系の学生も参加している。
- ・職業人・市民；全数の20%~30%である。北陸管内からまんべんなく参加。市民はわずかである。

5.4 進め方

- ・参加；学生がグループ参加(単独可)、市民・職業人参加
- ・発表；チーム毎に複数にて発表(単独可)
- ・語り合い(1)；チーム毎に島を作り、留守番隊と遊撃隊に分ける。者は他チームの遊撃に備え、後者は他チームの留守番にそれぞれ語り合い(議論吹掛あい)。途中で攻守交替。
- ・もしくは語り合い(2)；島ごとに論題を決め、参加者は好きなテーマの島に集まり、集まった者同士で語り合い。途中シャッフルあり。
- ・まとめ；各島での語り合いの様子を学生が報告。職業人からもコメントあり。

5.5 テーマ 話題提供テーマの種類と内容(例)

学生が持ち寄る話題について列挙する。テーマは研究室単位で取り組んでいる活動、学部的设计製図の課題、地域で取り組んでいる街づくり、大学のクラブ活動や学部を超えた横のサークル活動、など多彩である。以下にテーマの分野と細目について一部ではあるが以下に記す。

- ・コミュニティ・街づくり：山村、都市中心他、伝統街、ポットパーク、雁木、他

- ・構造、震災；能登半島地震、耐震補強と外構、他
- ・子ども；施設、遊び
- ・農、森林；雑木林
- ・作品、設計；住宅、傾斜地利用、他
- ・実物模型；住宅、商業施設、椅子、机
- ・他；学部的设计製図課題(学部生参加)

5.6 様相

a プレゼン

私たちこんなことしています、と熱弁。

b. テーマごとに着座の語り合い

街や福祉などのテーマでとことん語り合い。

明かり工芸品づくりの実演。語り合いながら。

c. 遊撃スタイルのフリーデイスカス

市民も交じっての語り合い。

時には職業人とラリー。

実物机作品を前に語り合い。

d. 各グループのまとめの発表

各自グループにて、語り合いの様子をまとめる。

6. 感想と意見

6.1 学生側の感想

(1) 自分の枠を超えて 共感、驚嘆、

・場の多様性と自由により、「ためになった」というよりも「面白かった」

- ・面白さとは、自分の紹介、他者の理解と思う。
- ・世代間、多くの専門を介して交流できた。
- ・聞いてもらったことで自信を深めることができた。
- ・種々の分野にて自分の意見で語り合いができた。
- ・自分のやっている研究で職業人ののにじみ出てくる人生観からの貴重な意見・アドバイスもいただいた。

(2) 楽しさの数々 場において

- ・実務者との対等な交流で語り合えた
- ・他大学の様子がわかった。
- ・他分野のことを知って学んだ。
- ・専門の枠を超えて語り合う。改めて構造分野を知った、
- ・プレゼンは計画の人というイメージであったが、その趣旨がよくわかった。構造系もがんばらなくては。

(3) 率直な感想として

- ・フランクな交流として皆で楽しくできた。
- ・気楽さに安堵して楽しむことができた。
- ・先生に背中を押してもらっていい経験をした。

6.2 職業人側 主に教員

(1) 場の意義

- ・自由闊達で多様な知的交流の楽しさに価値有
- ・議論というものの楽しさを知ったようだ
- ・しぼりのないところに、若者との対話が可能を実

感。

→平等・対等・自由のありがたさ。

- ・学園の枠を超えての交流。
- ・市民協働といえでも学校の枠を払しょくできていない。
- ・自立・自主性の育成として、いいチャンスと場。
- ・国際化や異分野交流といっているが、パーソナリティ確立なしには無理。

(2) 批評 (社会性、仲間、大人との関係)

- ・こうした機会の体験は若者に必要。
- ・教室以外のフィールドで刺激があった(街づくりで地域に出ていても)。
- ・建築の社会性に気づいてくれた。
- ・学生同士の連帯や仲間意識が垣間見られた。
- ・学生は元気がないというが、大人はそれに気付いていないだけ。

(3) 辛口批評

- ・学園紛争頃の熱い議論を期待したが無理だった。
- ・研究室のテーマで動いている場合が多く、これを学生はどう思っているのか。

7. シンポジオンの基盤づくりに

7.1 評価、効用

学生が自ら自由に楽しむことができれば十分とする。あえて効用を理屈づけるなら以下の通りである。なお、文中で使った語の「実感」は参加者のメンタルな反応ということにして、気づきから前進の築きへと繋がっていくと考えている。

- ・主体であることの面白さが楽しく実感。
- ・知的世界における自由・平等と相互尊重が実感。
- ・各種活動の背後にある人間的土壌や社会性が実感。多様な観点からの世界が垣間見られる。(志の醸成へ)
- ・職業人・市民も成長する学生と語り合いを楽しむ。

7.2 今後につなげる

シンポジオンは学生あつてのものであるだけに、学生の心意気が今後は無受けて伝わってほしいと願っている。そこで方策として三点記す。

(1) 学生側へ

- ・学生側への要望したいのは、参加いただいた学生諸君はぜひ後輩たちへ伝えていって欲しい
- ・学生側に異年次交流が増すといいが。
- ・自主グループが研究室グループとは別に存続して欲しい。

(2) 教員側へ

これまでと同様、シンポジオンの場にて若者へ旨を貸して欲しい。また、大学内でもシンポジオンのノリが沸き上がってくるようであれば見守っていただければと思う。

(3)しかけ側；これまで以上に、学会誌やHP、FBで広報をしていくとともに、いつでもどこでも誰でもが参集できる交流促進のムードづくりを図っていききたい。

8. あらためて運営に関する今後

シンポジオンが支部目玉行事として16年も継続していることは奇跡に近いのかもしれない。その一方では、今日的な問題も浮上している。

- ・これまで支えていた各支所において、若手への世代交代においてもシンポジオンのノリが沸き上がればとの思いあり。
- ・学生層にシンポジオンのノリが継続して伝わればとの思いあり。
- ・支部大会にて他事業との時間的折り合いづけもしていく。これまでは支部大会二日目の午後にたつぷりと時間をかけてのシンポジオン。今後はランチオンセミナーの形式も併用の思いあり。
- ・継続として；シンポジオンについて、実施し続けることで賑わいを維持していけると考えている。

9. おわりに

学生向けに学会らしい企画をとという学会支部の思いが学生を主体としたフランクな知的交流場の設立を發議し、そして始められたシンポジオンについて、何故必要か、ここまで歴史をどう刻んできたか、今日的役割をも含めて、説明をした。

シンポジオンの核心部分は、学生が話題を持ち寄っての語り合いにあり、そこには自由かつ同格で学生同士、職業時、市民との知的交流がある。これが、学生の学ぶ姿勢を自ら作り上げていくであろうし、学生にとっては、そうした理屈よりもまずは面白さと楽しさの満喫から好奇心や使命感を研ぎ澄ましていくものであろう。これがまた職業人や市民の心に響いていく。

こうしたことで評価をいただいているので、今後、シンポジオンの継続が最大の責務となっている。シンポジオンの周知に尽力、ネットワーク化を図り、継続に努力したい。

謝辞 シンポジオンは、これまで参加された学生の皆さん、支えてこられた職業人の方々のおかげで、今なお続いております。皆様方には、ここに記して謝意を表します。

A. 付録 (敬称略)

A1. 実施記録

16年間にて704人が参加。以下に、各年度で実施の会場、主務者、参加学生チーム数、参加者総数を記す。

2018	金沢工大、	須田、栗原	5、35
2017	信州大、	遠藤、野田*	3、32
2016	福井大、	磯、野田*	5、30
2015	長岡造形大、	後藤	講師2、23 シンポジウム
2014	富山大、	大氏	講師2、40 建築家鼎談
2013	金沢工大、	内田	26 作品、40 ポスターコンクール
2012	信州大、	松田	5、35
2011	福井工大、	多米	4、35
2010	新潟工科大、	深澤	8、60
2009	富山大、	横山、乙川*、松澤*	9、80
2008	金沢工大、	土田	5、65
2007	信州大、	柳瀬	5、50
2006	福井大、	薬袋、桜井	11、90
2004	富山県民会館、	土本、富樫	4、50
2003	金沢工大、	永野	3、30 若手主体
2002	信州大、	田守	9 実務者対象

A2. シンポジオンをこれまで支えた方々

(40 人程)

福井地域	9人、	福井大、福井工大
石川地域	9人、	金沢工大、金沢大、石川高専
富山地域	7人、	富山大、富山支所
新潟地域	6人、	新潟大、新潟工科大、長岡造形大
長野地域	8人、	信州大